過疎集落における「共感」形成へむけた試み
―― 聞き書き文集という方法について ――

吹　野　　卓*・片　岡　佳　美*・江　口　貴　康*

An Experimental Study toward Making Sympathy in Depopulated Villages:
A Method of “Kikigaki Bunshu”

Takashi FUKINO, Yoshimi KATAOKA, Takayasu EGUCHI

キーワード：過疎化、高齢化、聞き書き文集、生きがい、社会実験

0．はじめに

島根大学法文学部の社会学研究室では、ここ数年「聞き書き文集プロジェクト」を実施してきた。「聞き書き文集」とは調査員が面接調査で聴き取った話を文集形式の冊子にまとめ、それを話者のみなさんに還元するという試みである。本プロジェクトは、特に過疎地域における住民の共感形成にこのような働きかけがどのような効果を持ちうるのかという社会実験的研究として行われたものであるが、同時に調査員に対する教育的効果に関する検討も行われた。後者は、地方自治体における新人研修に採用されるなど応用的な成果にも繋がった。

聞き書き文集の作成手順やその中で伝えられているメッセージ内容等については既に報告をしたところである（江口他，2008）。この論文では、その後の試みを踏まえつつ、特に話者の皆さんにとって、聞き書き文集とは如何なる「場」であったのかについてより深く考察してみたい。

1．聞き書き文集という試み

1－1．過疎化集落における共感の重要性

先に過疎地域における共感形成という言葉を出したが、まずその点について問題の整理をしておく。

地方の地域共同体においては、一般に自治会の下部グループとして「組」あるいは「班」と呼ばれる組織が生活の様々な側面で互助的役割を担っていることが多い。特に伝統的な人間関係が残っている地方では、この組や班が単なる自治会活動以上の地域共同体としての活動を担っている。筆者の一人が所属していた「組」でも、毎月の集会でお経をあげ、神事としての神楽を主催し、葬儀を実施し、道づくりを行い、頼母子講を運営するなどの活動が実施されていた。このような活動をおこなう組の構成員の単位は、基本的に「家」である場合が普通である。ここでいう「家」とは、いわゆる「イエ」とは少し異なり、単

＊島根大学法文学部

純に特定の家屋で生活をしている家族集団を指している。したがって組の活動には、「家」の代表者が出て行くという形がとられる。

すなわち、過疎化が問題になるような地域の共同体（＝集落）は、個人ではなく「家」を構成単位とする家集団によって生活活動がなされる場であると捉えることができよう。

さて、過疎化の進行は、集落の共同体を構成する「家」の戸数の減少として現れることは当然である。そのために「家」の代表者からなる共同体の活動者の人数も減り、これまでの活動が維持できないという事態も生じてしまう。

しかし、過疎化は単に戸数の減少というだけではなく、残っている「家」でも家族人数の減少や高齢化といった現象をともなっている（図１参照）。この現象は、(1) もはや代表を共同体活動に出すことができない「家」が出現する、(2) これまでは「家」の中の生活活動の領域とされていたことも地域の人たちに助けてもらう必要が出てくる、といった事態を生じさせる。たとえば、高齢のため道づくりに参加できないとか、買い物も近所の人に頼らないとできないといったことである。

このように考えると、過疎集落においては、従来の自立した「家」を構成単位とする家集団による地域生活活動では対処できない事態が生じていると思われる。これまでなら地域活動に代表者を出さない「家」は批判の対象とされてきたが、その事情を理解し配慮をしなければならないし、買い物や通院あるいは生存確認といった「家」内で対処するべきと位置づけられていたことについても地域での援助体制をつくらなくてはならない。

従来型の家集団からなる地域組織は、このような状況に十分に対応できない可能性があるばかりか、「家」としての役割が果たせない人にとってはその存在自体が生活上の重荷になることもあり得るのである。また都会人が幻想するのとは異なり、「田舎」と呼ばれる地域においても他人の家には口出ししないという規範は厳として存在してきた。

となると、過疎高齢化が進む地域で人々の生活を維持していくためには、まさに新たな形での集落共同体の在り方が必要とされるのではなかろうか。それはある程度「家」という垣根を取り払った互助的な、いや「互助」という言葉が含意する相補性が無くても違和感なく配慮や援助が可能な共同体であろう。

そして、そのような形の共同体が可能になるためには、「共感」が大切な鍵となるはずである。すなわち、家族内で見られるような「かけがえのない他者」として家族外の者をも共に集落共同体に生きる仲間と感じることであ

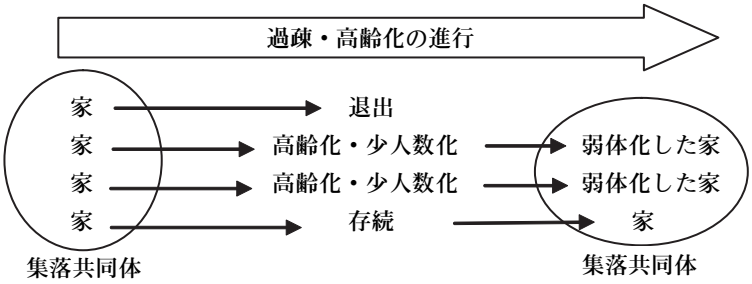

図１　過疎高齢化に伴う集落共同体の変化

る。「共感」は援助的行動を行う側に必要なだけではない、人は「共感」無き人から助けられたいとは思わないものなのだから。

１－２．聞き書き文集の狙い

筆者らは以前、中山間地において実施された質問紙調査から、「生きがい」について語られた自由回答欄の記述内容を数量化して分析する試みを行った（吹野・片岡，2006）。その際に意外であったのは、「生きがい」として仕事・趣味・社会貢献といった積極的具体的な活動以外のことが多く語られていたことである。また、地域特性からか農作業に関する語りも多かったが、それは農業という仕事としてではなく、作物を育てること自体の喜びについてであった。この結果を踏まえ、更に「生きがい」についての量的調査を行った。図２はその回答を数量化３類を用いて整理した「生きがい」のマッピングである（曲線はクラスター分析の結果を示している）。この図の縦軸と横軸を、我々は「抽象ー具体」軸と「在るーする」軸と読み取った（吹野・片岡，2009）。

図２に示されている「在る」ことに関する生きがいは、何かを新たにするようなことではなく、日々の自分自身の在り方、存在意義を確認するような形での「生きがい」であると言えよう。先述の自由回答欄を用いた分析の際にも、おそらく多くの回答者は、問われたからそう回答したのであり、「生きがい」について問われ、考え、記述するという営みが、「かけがえのない私」の確認作業になったのではないかと推測された。なお、「在る」ことに関する語りは高年齢層で多く見られる傾向があった。

さて、先に過疎高齢化が進行する集落共同体では、「共感」すなわち他者を「かけがえのない他者」として見ることが重要になるのではないかと指摘した。またここでは、「生きがい」について、問われて、考え、語るという

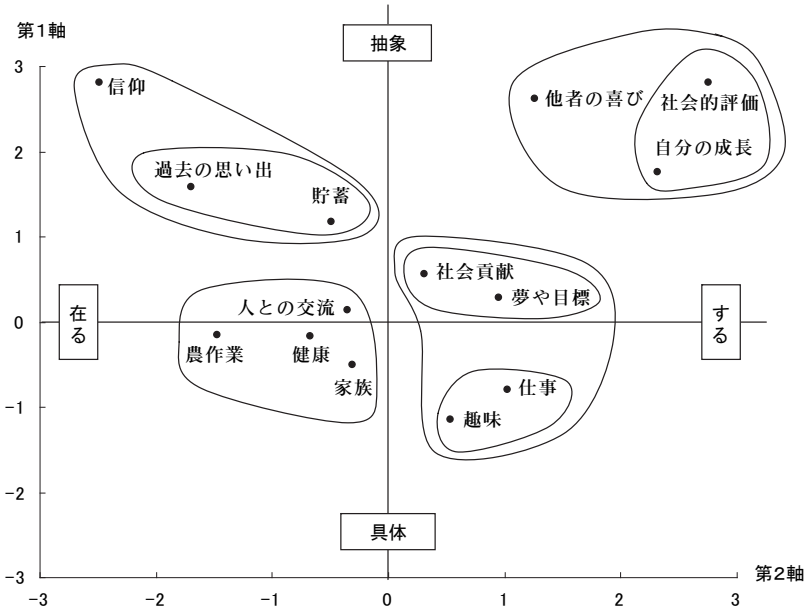

図２「生きがい」の分類図

営みが「かけがえのない私」の確認作業となること、特にそれが高齢者において言えるのではないかということを指摘した。

聞き書き文集プロジェクトは、この２つの指摘を結びつける試みとして位置づけることができる。

すなわち自己の存在意義を確認する「かけがえのない私」についての語りを「文集」という形で配布し、集落共同体の人々が読者となってそれを追体験することにより「かけがえのない他者」としての共感を生む一助になるのではないかという考えである。

たしかに日常生活のなかでも集落内のコミュニケーションはかなり行われ、相互の理解・共感のための重要な役割を担っている。しかし、日常生活での話題という枠から離れたコミュニケーション通路の存在は、別角度からの共感形成の手段となると思われる。なるほどたとえば地域イベントや郷土誌の編纂などは、非日常的な通路での地域住民同士の理解・共感に寄与するものである。ただし、これらはほとんどの住民が参加するといった性質のものではない。外部からの働きかけにより普通なら他人に見せるような文章を書かない人々の語りを文集化してそれを集落内の全戸に配布するという試み、すなわち聞き書き文集という試みは、このような非日常的なコミュニケーション通路となりえるのではなかろうか。

１－３．聞き書き文集の作成

聞き書き文集は基本的に、選定された集落において学生または市役所新入職員を調査員とした聴き取り調査を実施し、その結果を文章化するという方法で作成した。聴き取りの際には、聞き書き文集について説明したのち、

表１　これまでに作成した聞き書き文集

実施年度	タイトル	実施地	調査員	調査対象
2007 年度	みやざき	雲南市	学生	集落全戸
2009 年度	松風	隠岐の島町	学生	集落の一街路全戸
2010 年度	夢歩き	隠岐の島町	学生	地域活動参加者
2010 年度	杉戸	雲南市	市職員	集落全戸
2011 年度	神代	雲南市	市職員	集落全戸
2011 年度	田縁風景	松江市	学生	地域活動参加者

図３　作成された聞き書き文集

主として「生きがい」と「地域への思い」に関する質問をするが、話の流れに任せて自由に語ってもらった。

調査員が書いた草稿は語り手のチェックを受けて必要な修正を行なったのち、集落の写真なども入れて印刷物とした。作成された文集はその集落の全戸に配布し、後日感想等を伺いに行った。

これまでに作成された聞き書き文集は表1のとおりである。ただし表の「夢歩き」とタイトル未定の学生主体のものは研究的性格が強いため、少し広い地域で地域活動をしている人の「語り」を雑誌風にまとめたり質問項目を多少変えたりなど、変化をつけながら実施している。調査員が市職員となっているものは、島根県雲南市の新人研修のひとつとして聞き書き文集プロジェクトが採用されたものであり、筆者らが研修の指導を行った。また、一部については匿名化を行った見本版を作成し、教育用やこの活動に関心を持つ人への配布用に使用している。

2．聞き書き文集とはいかなる場か

2－1．他者を通じた自己との出会い

以下では、実際に聞き書き文集プロジェクトの過程で見えてきた事柄について報告して行きたい。

先述した「生きがい」についての語りの分析は、調査票の自由回答欄に記載された文章を対象としたものであり、問われて、考えるという営みがなされたというのは文面からの推測の域を出ない。以下は、聞き書き文集作成のための学生による面接調査の録音内容を書き起こしたものである。

【学生】 では、生きがいは何ですか？
【 夫 】 生きがい…、生きがいもうなくしてしまったしなぁ（笑）
【 妻 】 今は何だろう（笑）
【 夫 】 …生きがい、生きがいはやっぱ家族だろう。それ以外はないからな。家族がようなって（よくなって）ほしい。いいっちゅうだけでほんと、いろんなことができるわなぁ。
【学生】（家族が）元気でいてくれれば？
【 夫 】 元気で、苦しまずに行こうやなぁ、うん。たぶんおれが先死ぬじゃらーずけん。
【 妻 】 ちゃんと送ります。
【 夫 】 これ（奥さん）とかねぇ、子ども、孫。そのことが心配だけん、いやもう、がんばるしかないね。これがまぁ…。意味が違うかなぁ、生きがいは。でもそれが本音だがぁ。

なおこの会話の後、夫がその前にお酒が楽しみだといっていたことについて学生が訊ねるが、夫は考えながら「お酒は楽しみではあるが生きがいではない」と回答している。

出来上がった聞き書き文集という冊子には、このような自己について改めて考えている様子はむろん再現されない。しかし、聞き書き文集作成という過程は、学生（＝聞き手）から出される非日常的な質問が自己について再考する契機となっていると言えよう。

一方、完成した文集に載せられる文章は、学生（＝書き手）による再構成（誤解も含め）がなされたものであり、語り手が語ったと記憶している話とは必ずしも一致しない。文集の草稿は語り手本人に確認してもらうという手続きを踏んでいるが、その際に大幅に赤書きで修正される方もいるし、また「言いたかったことがうまく書かれていないけど、そう聞こえたのかな」と述べる語り手もいた。すな

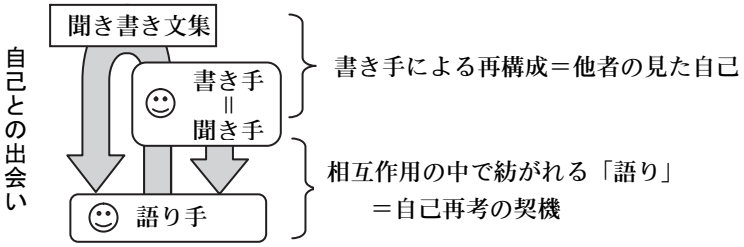

図4　自己との出会いの場としての聞き書き文集

わち、聞き書きという過程を経た自分の語りとの出会いは、日常生活では体験することのない形での他者を経由した自己との出会いとしての性格ももっている。

このように、その作成過程も含めた聞き書き文集は、聞き手＝書き手と語り手の相互作用の中で生じる、普段はない自己との出会いの場としての性格を持っていると言える（図4）。

2－2．時間軸の中での語り

当然ながら語り手は聞き手が何者であるかによって語る内容を決定している。たとえば、市職員が聞き手の場合には住民に対する市の態度についての話などがなされている。

我々が実施した聞き書き文集作成においては、聞き手は学生もしくは市の新入職員であり、20歳代前半の若者たちであった。一方で語り手の多くは高齢者であり、「若者」の知らないであろう情報すなわち昔のことが多く語られている。完成した文集のかなりの部分で、戦時中の体験、どんな靴を履いていたかなどのかつての暮らし、離婚や失業なども含めた自己の経歴に関する話などが述べられている。また、完成後に感想を聞きに行った際にも、言い足りなかった話として戦時中にサイパン沖で搭乗していた艦が撃沈され九死に一生を得た話をして下さった方もいた。

このように聞き書き文集は、時間軸の中での自己像が語られる場としての特徴を持っていた。たとえばある高齢の女性は、姑から厳しいことを言われ辛い思いをした体験を詳しく述べた上で、姑が亡くなる一ヶ月ほど前に「ここにおって、子供を育てて、わし看取ってごせ」と言われて涙が出たという体験を話してくださっている。この出来事自体は何十年か前のことであるが、それを大切なこととして述べるその言葉は、生きてきた人間としての厚みをもった語りとなっている。

また、聞き書き文集はごく普通の人の「語り」が印刷された文字として残る場でもある。今はまだ幼い孫や遠隔地に住む子供たちも冊子となった文章を通じて語り手と出会うことができる。完成後に感想を訊ねにいった際に、これを読んだ孫から「おじいちゃん頓原出身かね」と言われたと教えてくれた語り手もいた。また「人間は姿・形がなくなってから、もっと聞いとけばよかったと思うものだから」と記録と喜んでくださる方もいた。

さらに、「お母さんも読んでいるといろいろなことを思い出すようで、最近は昔話をよく話してくれます」という話もあり、聞き書き文集が媒介となって新たな次世代にむけた語りを引き出すといった働きもあった。

ここでみたように聞き書き文集は、生きてきた時間をもった人間像を描くと同時に、ま

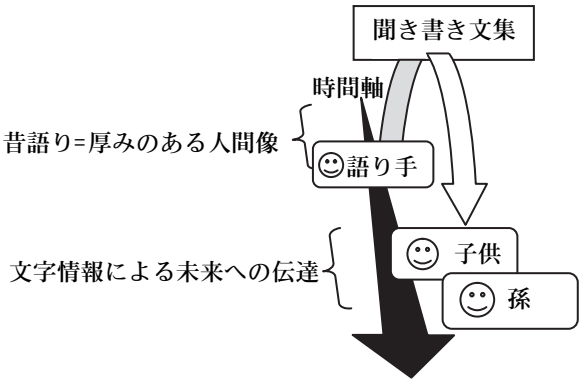

図５　聞き書き文集の時間軸

た未来に向けての情報伝達の場としての意味も持つと言えよう（図５）。

２－３．他者を通じた他者との出会い

聞き書き文集は、完成後に集落の人々に配布されるものであるので、それを意識した集落内の他者へ向けたメッセージも語られている。たとえば、地域の活動に参加出来ずに迷惑をかけ申し訳なく思っていることや、近くの町までの買い物などには車を出してもよいといったメッセージである。

またある方は、「私は足が悪いので、家のチャイムを鳴らされてもすぐには玄関に出ることができません。ようやく出た時にはすでに帰ってしまわれた後といったことがよくあります。私は皆さんに私がどこまで出来るのかを知ってもらいたい、そして私ももっと皆さんのことを知っていきたいと思っています。これから地区の皆さんともっと『あたりまえの関係』を築いていけたらと思います。」と語っており、これを読んだ集落の方々も「もっとわかってあげていればよかった」、あるいは「気がかりだったので、どのように思っておられるのかわかってよかったです」と感想を述べておられた。

このように聞き書き文集は、通常の近所付き合いとは少し異なるコミュニケーションの場としての意味を持っていることが確かめられた。

このような意図的に地域の人に向けられた

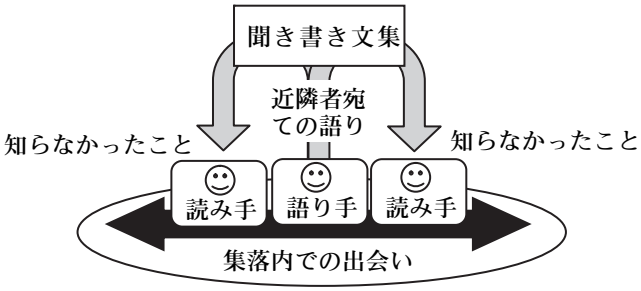

図６　他者との出会いの場としての聞き書き文集

メッセージ以外にも、聞き書き文集は近隣の他者について新たな情報を受け取る場として機能したと思われる。たとえば、鉢植えの花は遠くに住む娘にもらったものだから大事にしているといったささやかな事でも、近隣の人は聞き書き文集を通じてその思いに接することができるのである。完成後に感想を聞いたさいにも、「こうやって田舎だけどなんか人のプライバシーにまでは立ち入らないってところがあるんですよ。だけん結構知らないこと書いてありましたよ。こんなこと考えておられたんだなあって思いましたよ。」といった話をして頂いた。また、今まで誰にも話したことのなかった「山の神様」についての話を、聞き手の調査員に初めて語ったことをうちあける人もいた。

このように聞き書き文集は、集落内で暮らす人々の間に日常的な会話とは異なるコミュニケーションの場としての意味を持ち得たと言えよう（図6）。

２－４．他者を通じた集落との出会い

むろん聞き書き文集は一人の語りのみを載せているだけではない。同じ集落に暮らしてきた人々の語りが一つの冊子としてまとめられている。これを通して読むと複数の人々が同じ思いを共有していることも見えてくる。

たとえば、ある語り手は「自治会の集会でも、昔は会が終わると三、四軒を梯子してお酒を飲んで回ったものです。最近はそういう機会も減ってしまいました。」と横の繋がりをもつ機会が減り淋しくなったことを述べているが、文集を読むと同じ集落の複数の人々が同様にかつての飲み会などがなくなったことを残念に思っていることがわかる。またこの集落は散村であり家と家とが離れているため、近所の人と「電話で」話すのが楽しみであったり、隣の人とは会うけれど少し離れた家の人とは滅多に話す機会がないといった事情も述べられている。このように鳥瞰的にみることによって、同じ思いをしている人々がいることや、意図的に機会を作る必要があることなどが見えてくるのではなかろうか。

また別の集落では、多くの語り手が子供の頃に炭焼きの作業を行ったことについて述べている。炭焼きの作業は辛くはあるが、現金収入となり豊かな村であったこと、あるいは協力しあう作業であったことなどをそこから知ることができる。この集落はその後、比較的早い時期に農機具共同利用組合、そして農

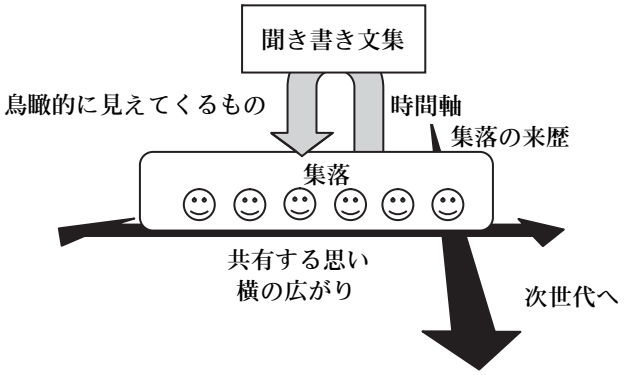

図７　集落との出会いの場としての聞き書き文集

産加工所を立ち上げることになる。更にこれらを前提として農事組合法人化がなされ、集落内の農業が効率的になされるようになった。このような集落で協力しあう体制を実現する上で、かつて協力しあう事によって成り立つ炭焼きの村であったことが有利に働いたことが複数の語りから読み取れる。

これは聞き書き文集が、歴史的経緯の中で形成されてきた集落のアイデンティティを確認できる場になっている例であると言えよう。この集落の語り手の何人もが、共同体としてのまとまりの良さについて語っているが、炭焼き時代からの時間軸をも包含した集落像の中でその言葉がより理解できるのである。

このように聞き書き文集はまた、集落の構成員の思いが共有されていることや、次世代へと伝えていくべき集落としてのアイデンティティの姿などを鳥瞰的に読み取ることができる場でもあると言える（図7）。

3．まとめ

これまで論じてきたように，聞き書き文集は，自己との出会い、世代を超える出会い，同じ集落に暮らす人びととの出会い，生活の場である集落との出会いを可能にするものであったと思われる。

そしてそれぞれの出会いは，世代を超えた繋がりの中に自己を位置づけること，同じ集落の人びとと自己を関係づけること，そして，集落の中に自己を見いだすことを可能にする。つまり，聞き書き文集プロジェクトとは，語り手にとっては，共同体の中に自己を再帰的に見いだす過程だったのではなかろうか。「生きがいとは何ですか」と問われたとき，人々が「はて私にとって、生きがいとは何だろう」と自問しながら自己を確認していったのと同様に。

本稿の前半で、生きがいとしての「在ること」の意味について述べた。本稿後半での考察を踏まえると、聞き書き文集は、時間軸の中に存在し、共に生きてきた人々からなる共同体の「在ること」の確認の営みであると言えよう。そしてまた、「かけがえのない私」の「かけがえのなさ」の一部が「他者と共に存在している私」であるならば、共同体としての自己確認もまた、「私」の自己確認である。

この試みが果たして集落共同体内で「共感」と呼べるものを生み出したのかについては直接に測定することはできない。また、そうであったとしても、その力は微力なものに過ぎないであろう。しかし、共に生きる人々からなる集落内での日常とは異なるコミュニケーション通路であったことは確かであるし、それが共感を生むための前提となる相互理解に何らかの貢献ができたことは確かであったと思われる。

そしてまた、共同体としての「在ること」の確認、すなわち「かけがえのない」ものとして再確認していくことの重要性に気づかされた。「地域おこし」と言われる活動は「すること」に重点が置かれがちであるが、それでは「元気」のない地域はダメなのかというと、そうでもあるまいと思われるのである。「共感」というものが「かけがえのない我々」の中で持たれるのであれば、いわゆる地域活性化（＝すること）とは異なる視点も大切ではなかろうか。

なお最後に余計かもしれない一言を付け加えておけば、「共感」しあう人々からなる共同体をすべての人が住みやすいと感じるとは限らないことも忘れてはならない。

【引用文献】

吹野卓・片岡佳美，2006，「語られた『生き甲

斐』の構造ー中山間地域調査における自由回答の数量的分析」，島根大学法文学部，『社会文化論集』，3：15-27.

江口貴康・片岡佳美・吹野卓，2008，「限界集落に生きる人々の『語り』の共有化の試みー島根県雲南市掛合町の一集落を事例として」，島根大学法文学部山陰研究センター，『山陰研究』，1：1-24.

吹野卓・片岡佳美，2009，「『生きがい』とは何かー中山間地域の課題としての『生きがいづくり』再考」，島根大学法文学部，『社会文化論集』，5：19-28.

この研究は、島根大学重点プロジェクト「中山間地域における住民福祉の向上のための地域マネジメントシステムの構築」（代表：伊藤勝久）、および科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「過疎集落における共生のための実験的研究」（代表：吹野卓）の補助金を受けて実施された。